

平成23年度西海ブロック水産業関係研究開発推進会議
有明海・八代海研究部会報告書

| | |
|-------|-----------|
| 会議責任者 | 西海区水産研究所長 |
|-------|-----------|

1. 開催日時・場所 日時：平成23年11月9日（水） 13:30～17:30
場所：長崎ブリックホール
2. 出席機関及び人数 6機関 31名
3. 結果の概要

| 議 題 | 結果の概要 |
|--------------------|--|
| 1. 開会 | 西海区水産研究所長が有明海・八代海漁場環境研究センター長が開会を宣言した。 |
| 2. 挨拶 | 西海区水産研究所長から「有明・八代海域でシャトネラ赤潮はなかったものの、貧酸素、タイラギやサルボウの大量へい死、ヘテロカプサ赤潮の初発生、ノリのアカグサレ病の兆候など問題が続発している。8月には特措法が改正され、この海域の再生に向けて新たな局面をむかえている。水産関係者の連携が今後ますます必要性となる」旨の挨拶があった。 |
| 3. 座長選出 | 有明海・八代海漁場環境研究センター長を座長として選出した。 |
| 4. 議事 | |
| 1) 有明海・八代海を巡る最近の情勢 | 各機関から以下の報告があった。 福岡県：アサリは低水準状態が続いている。また、サルボウが10月以降に大量へい死しているのが確認された。タイラギは比較的着底量の多かった平成22年級群が立ち枯れ様のへい死で大きく減少している。種付け後順調に推移したノリにはアカグサレ病が確認され注意を要する状況である。一方、クルマエビ・ガザミは近年になく順調に推移している。 佐賀県：7～9月に散発的な貧酸素が発生したことと、梅雨時の降雨も重なり大牟田～太良沖のタイラギの平成22年級群に大量へい死が生じた。今後漁期前調査をおこない、漁の可否を11月28日に決定する。例年、9月頃には治まるサルボウの死亡が10月以降も継続し、大きな問題となっている。クルマエビ・ガザミは8月下旬以降に漁獲が増加した。11月5日にのり漁場でアカグサレ病が初認 |

| | |
|------------------|---|
| <p>2) 研究会等報告</p> | <p>された。</p> <p>長崎県：今年、シャトネラ赤潮は発生しなかった。島原や諫早でコシノディスカス粘性浮遊物が認められたが、短期間で終息した。養殖マガキにフジツボの付着が多いものの、55%が生残している。ホトトギスガイがアサリ養殖場に発生しており、駆除に苦慮している。ガザミ、エビ類の漁獲は昨年より全般的に好調である。</p> <p>熊本県：粘性浮遊物が長洲沖で確認された。ヘテロシグマとヘテロカプサが確認され、赤潮警報を発令した。ガザミの漁は平年並み、有明海でシャトネラ赤潮が発生しなかったためかクルマエビの漁は好調である。冬季の水温低下時に天然魚・養殖魚で異常遊泳やへい死が認められた。八代海ではシャトネラ赤潮は発生しなかった。</p> <p>鹿児島県：八代海域においてシャトネラをはじめとした有害赤潮の発生はなかった。昨年、一昨年と大きな被害を発生させた、シャトネラは概ね 0.1 細胞/ml 以下と低い密度で推移した。</p> <p>有明海・八代海漁場環境研究センター：今年度の有明海・八代海の概況を総括した。今年度新たに赤潮情報システムを開発し、運用を開始した。12 機関が連携し、貧酸素水塊の一斉調査を行った。震災に対応したカキ礁での採苗試験及び養殖種苗としての特性評価を行った。</p> <p>資源培養グループ長から、二枚貝浮遊幼生の簡易同定法に関する研修会、特産二枚貝増産研究会等の活動結果について以下の報告を行った。</p> <p>①有明海・八代海における二枚貝浮遊幼生の簡易同定法に関する研修会（6月21日）：モノクローナル抗体を用いた幼生の同定と、リアルタイム PCR による幼生の定量法について実習を行った。</p> <p>②特産二枚貝増産研究会（11月26日）：2題の講演の後、震災で供給が心配されたカキ養殖の人工種苗についてと今年度、有明海の奥部で大きな問題となっているタイラギの大量へい死について情報提供があった。本会については、競争的資金獲得や事業提案が必要であるものの、各県から情報交換の場としての存続の希望が多いので、何らかの受け皿を検討していくことで合意した。サルボウの異常死亡について情報提供があった。</p> <p>有明海・八代海漁場環境研究センター長からその他の活動として、シャトネラ赤潮等対策推進協議会および H23 年度有明海の魚介類へい死に関する検討会議について概要を以下の様に報告した。</p> <p>③シャトネラ赤潮等対策推進協議会（10月19日）：有明海・八代</p> |
|------------------|---|

| | |
|---|--|
| <p>3) 水産研究開発成果情報の審議</p> <p>4) 今後の共同調査研究</p> | <p>海漁場環境研究センター長より昨年、一昨年大きな被害を引き起こしたシャトネラ赤潮に関する会議の概要を説明した。平成 23 年度に第 1 回～3 回を開催し、被害状況の取りまとめと対策の検討、進捗状況の確認を行った。また、今年度はシャトネラが赤潮化しなかったため、第 4 回の協議会においてその状況を総括すると共に、原因について仮説を共有した。</p> <p>④平成 23 年度有明海の魚介類へい死に関する検討会議（10 月 20 日）：シャトネラ赤潮等対策推進協議会で整理した内容を受け、有明海・八代海におけるモニタリングの現状と今後の方向性について情報及び意見の交換を行った。その上で、有明海・八代海漁場環境研究センター長から関係機関とこの点について継続的に協議していくことを提案し、了承された。</p> <p>シャトネラ日周鉛直移動の観察（熊本県）、及び赤潮情報システムの開発・公表（当所環境保全グループ）について成果報告がなされた。若干の字句の修正について指摘があり、修正を条件に採択することで了承された。また関連して赤潮関連データをさらに充実することが要望として出された。</p> <p>福岡県、佐賀県、当所からノリ養殖、タイラギへい死要因、クルマエビ減少要因、シャトネラ赤潮発生原因、貧酸素水塊漁業被害防止、粘質状浮遊物発生原因について今後の進め方に関する提案がなされた。とくに、タイラギへい死要因については、これまでの研究結果の総括及び残された課題の整理が必要であるとの指摘があった。また、平成 22 年度の長崎県・熊本県の提案（赤潮被害対策、幼生同定法、二枚貝養殖増産技術開発）への対応結果が報告された。特に、有明海・八代海漁場環境研究センター長から有明特措法の改正に伴い総合調査評価委員会のミッションが再開されたこと、同委員会では今後これまでの調査研究の評価と再生に向け新たなマスタープランの作成が諮られることを説明し、水産の立場で関係機関が結束し、方向性を発信していくことが重要である旨、提案した。</p> <p>有明海・八代海漁場環境研究センター長より、平成 22 年度に提案された赤潮関連のニーズについて対応結果（案）を説明した。また、平成 23 年度のニーズとして熊本県から提出された 3 課題（有用魚介類幼生、仔稚魚の簡易判別手法の開発、シャトネラ赤潮被害軽減対策、二枚貝類の養殖増産技術開発）について取組方針（案）を提示したところ、了解が得られた。</p> |
|---|--|

| | |
|---------------|---|
| <p>5. その他</p> | <p>サルボウ異常へい死について情報提供があった。福岡県から「サルボウは本年度に限っては10月以降もへい死が止まらず、現在50～70%のへい死率を示している。漁業者の報告では明確な産卵期を示さず身がやせている」との報告があった。また、佐賀県からは「福岡と同様な状況に加えて、サルボウは鰓の退色と萎縮、大小体サイズによらないへい死率の高さを示している」ことなどが報告された。資源培養グループ長から福岡のサンプルを観察した結果について「鰓が特異的に弱り、身やせがひどい。有明のサルボウのへい死問題は1970年代半ば～1980年代半ばにもあった」ことを説明した。今後、このことに関しては、11月29日に第2回有明海の魚介類へい死に関する検討会議を長崎市内で開催し、情報交換等していくことが了承された。</p> <p>最後に西海区水産研究所長から、来年に開かれる第2回総合調査評価委員会に向けて、西海区水産研究所が音頭を取って勉強会を開催していくので連携、協力をお願いする旨の発言があった。</p> |
| <p>6. 閉会</p> | <p>有明海・八代海漁場環境研究センター長が閉会を宣言した。</p> |